

えんま大王の姿で
地獄を説く愛知教育大教授

たかす じゅん
鷹巣 純さん(52)

「わしが、えんまである。地獄の話をきかせてやろう」。赤い顔にひげ、手作りの衣装で博物館に現れ、おどろおどろしい地獄絵を見せながら輪廻転生や地獄の責め苦について説く。素顔は、仏教絵画史が専門の愛知教育大教授だ。愛知県安城市で育ち、小学生の時に愛読した妖怪図鑑で「この世ならぬものに興味を持った」。母親の実家が寺で仏教に興味を広がり、地獄絵を研究。えんま大王の



この人

扮装は、二〇一〇年にシンポジウムの演出で始めた。その後、寺や商店で講演を頼まれるように。子どもを相手に話すことも多い。地獄を怖がらせるだけなく「自分は人にひどいことをしてないか考え、思いやりを持って生きて」と呼び掛ける。「地獄は誰も見たことがない。全て想像で描かれたので議論の余地が多いし、異なる思想や文化の影響もあるし、美術史研究の醍醐味が詰まっている」と、地獄絵の魅力が語れば止まらない。質の高い作品は多くないこともあって、研究者は少ないのが現状だ。「怖いだけではない面白さを伝えたい。えんま姿に興味を持った子の中から、次の研究者が現れたらうれしいですね」(川原田喜子)